土呂久公害前史

記録作家

川原　一之

目次

Ⅰ章　祖母・傾・大崩山系の地質
1―1　ユネスコエコパーク
1―2　祖母・傾・大崩山系と硫砒鉄鉱
1―3　佐伯の亜砒酸工場

Ⅱ章　土呂久の歴史と民俗
2―1　とろくの語源
2―2　落人伝説の里
2―3　修験の道場
2―4　西国一の長者をうんだ銀山

Ⅲ章　土呂久鉱山史
3―1　江戸中期の煙害
3―2　幕末の繁栄
3―3　渡り鉱夫の墓
3―4　明治以降の土呂久鉱山

Ⅳ章　土呂久の産業
4―1　狩猟採取
4―2　焼畑から常畑へ
4―3　水田の開発
4―4　畜産の伝統
4―5　山の自然とともに

Ⅴ章　解体期の共同体
5―1　和合会創設
5―2　創設者
5―3　自治組織に発展

Ⅰ章　祖母・傾・大崩山系の地質

1－1 ユネスコエコパーク

宮崎県高千穂町の土呂久は、「生物圏保存地域」（通称：ユネスコエコパーク）に登録された祖母・傾・大崩山系に位置する標高350～800メートルの谷間の集落である。2018年10月1日現在の世帯数35、人口78（男44、女34）の過疎の進む小集落で、エコパークの核心地域を取り囲む緩衝地域の外側の移行地域にはいっている。

祖母・傾・大崩山系がエコパークに登録された理由は、①急峻な山岳地形と美しい渓谷、②幅広い植生と希少性の動物、③自然への畏敬の念とともに、自然保護活動や自然資源の持続的活用が図られているからだとされている。なぜこの地域に急峻な地形がみられ、希少な生物種の宝庫となっているのか、その背景にあるのが、祖母・傾・大崩山系特有の次のような地質である。

ⅰ　もともとは海底だったところに砂や泥が堆積し、やがて隆起して陸地になった。

ⅱ　約1400万年前から火山活動が活発になり、まず傾山が噴火し、ついで祖母山が噴火して、火砕流台地ができ、陥没によってカルデラを形成、その後の浸食によって現在の地形になった。

ⅲ　大崩山では、マグマが地表近くまでせりあがり、そのときに沈んだ地域の周縁にできた割れ目にマグマが貫入して、楕円状に巨岩・奇岩が林立する急峻な環状岩脈（リングダイク）を形成した。

この地域では、海底にあったときに堆積した地層が、新生代の新第三紀（2250万年前～180万年前）の火山活動によって火成作用を受け、岩石類が変化して鉱床を形成した結果、多くの鉱山が開発された。現在は操業している鉱山はないが、かつて操業した知名度の高い鉱山に、木浦、豊栄、尾平（以上、大分県）、土呂久、見立、槇峰（以上、宮崎県）があった。短期間掘削された小鉱山は数知れず、高千穂町史は「第四章鉱業」の概説で「高千穂地方は新第三紀に花崗岩の貫入などの火成作用が行なわれ、これに関連して、錫、銅、鉛、亜鉛、砒素、硫化鉱、その他多くの鉱種を含む鉱脈が多数存在している。特に鉱種の多さに於いては九州第一位であり、この地域一帯の地下資源は、我が国主要鉱物の宝庫とさえいわれている」①と記している。

【祖母・傾連山の鉱山分布地図】

1－2 祖母・傾・大崩山系と硫砒鉄鉱

宮崎県が1963年に刊行した「宮崎県の地質と地下資源」は、第2編概説の「接触鉱床および高温型鉱脈」の中で、土呂久鉱山の地下資源について、「土呂久鉱床は古生界とこれを切る花崗斑岩の岩脈との接触部にある接触鉱床であって、主に石灰岩中あるいは石灰岩の縁りに形成された不規則な塊状、レンズ状、短い脈状などの鉱体群から成り、極めて多種の鉱物を産する。すなわち、金属鉱物

としては硫砒鉄鉱・磁硫鉄鉱・黄銅鉱・方鉛鉱・閃亜鉛鉱・錫石・黄鉄鉱・磁鉄鉱・赤鉄鉱・輝安鉱・白鉄鉱など、鋼石鉱物としては柘榴石・珪灰石・灰鉄輝石・透輝石・透角閃石・陽起石・橄欖石・ベスブ石・緑簾石・黝簾石・黒雲母・リシャ雲母などの接触変性鉱物や、電気石・斧石・ダンブリ石・スカポライトなどの気成鉱物のほかに、石英・方解石・アルカリ長石・菱鉄鉱・石膏が知られている。また2次鉱物として、褐鉄鉱・白鉛鉱・黄鉛鉱・青鉛鉱・異極鉱・カレドニア石・レッドヒル石・藍銅鉱・孔雀石・珪孔雀石・葱臭石などがみいだされている」②と、きわめて多種の珍しい鉱物を産出する鉱山だったことを述べている。これら多彩な鉱物の最初に書いてあるのが硫砒鉄鉱である。

硫砒鉄鉱（FeAsS）は、その名前からわかる通り硫黄と砒素と鉄を主な成分とする鉱石であり、金槌でたたくと簡単に割れて、それを焙焼すれば砒素は亜砒酸（As_2O_3）、硫黄は亜硫酸ガス（SO_2）になって煙とともに流れだし、あとに酸化鉄（Fe_2O_3）を主成分とする鉱滓（焼き殻）が残る。祖母・傾・大崩山系の各所で硫砒鉄鉱を焙焼して亜砒酸を採取した歴史が、この地域の郷土誌に記されている。古い文献では、明治３７（１９０４）年１２月に大分県の木浦鉱山を訪ねた林勝美が「駄債形尾に登り、亜砒酸製造を見る。其一帯山の斜面は草木枯死して鉱毒の深刻さを如実に物語る。荒廃さは木浦山中の一奇観である」という紀行文③を残している。

２００５年３月２４日の大分合同新聞には、九州大学の井沢英二名誉教授（資源工学、鉱床学）らの調査で、緒方町（現・豊後大野市）上畑の山中で見つかった石組みの精錬窯が約１００年前の亜砒焼き窯だ、と確認され、亜砒焼き窯は全国に現存例がないので「貴重で興味深い発見」と話している、という記事が掲載された。

２０世紀のはじめ、祖母・傾連山では硫砒鉄鉱を採掘する鉱山がいくつもあって、亜砒酸が製造されていたことがわかる。

１－３　佐伯の亜砒酸工場

中でも注目されるのは、祖母・傾連山の大分側鉱産物の積出港であった佐伯市の市史が、「市民生活と公害」の節で大正年間の亜砒酸工場による公害を記述していることだ。そこには、「大正５年１０月頃宮城正一氏の経営にかかる灘鳥越の亜砒酸工場が煙毒問題の為め、翌年４月頃苦木に移転していることは当時本紙に報道せる所なるが……」という大正８（１９１９）年７月２７日の佐伯新聞の記事が引用され、さらに「当時本紙に報道せる所」の説明として、大正６（１９１７）年６月２９日の佐伯新聞記事が要約されている。それによると、この亜砒酸工場は宮城正一が大正４（１９１５）年４月に最初に人家から遠い苦木に建設したのだが、鉱石輸送に不便なので同年８月、農家に近い鳥越に移転して操業を始めた。「ところが農作物に被害が出て、工場立退きを迫られ」「欧州大戦勃発の影響で、亜砒酸鉱業は活況を呈して、会社としても工場の拡張を迫られたので、製薬工場を再び苦木に移し、そして農作物の被害補償として金百円を農民に支払って、一応解決した」④というのである。

佐伯には１９１０年代の中ごろ、木浦鉱山などから運んできた粗製の亜砒酸を精製する工場が建設され、工場周辺の農地に煙害をひきおこしたことで、農作物被害の補償金１００円を払って、民家から離れた苦木という場所に引っ越した。煙害の起きた鳥越に住んでいて、当時を憶えていた人に１９７６年に会ったとき、その人は宮城のことを「九州の亜砒酸の元祖」と言った⑤。

土呂久では、亜砒酸の製造が始まったのは大正９（１９２０）年６月で、亜砒焼きを始めたのは「大分県の佐伯から来た宮城正一」と言われてきた。佐伯市史は、その人物が土呂久に現われる前に、佐伯で亜砒酸工場を経営して煙害をおこし賠償金を払っていたことを記録していた。土呂久の砒素公害は、祖母・傾・大崩山系の地質と鉱山の歴史に深く結びついて起こったのである。

Ⅱ章　土呂久の歴史と民俗

2－1　とろくの語源

“とろく”とは珍しい地名である。弥生遺跡で有名な静岡市の「登呂（とろ）」、川下りの観光名所になっている紀伊半島の「瀞八丁（どろはっちょう）」や秩父の「長瀞（ながとろ）」、２０１８年の冬季オリンピックのカーリングで名前をはせた北海道の「常呂（ところ）町」、高千穂町から約５０キロ下流の延岡市に「土々呂（ととろ）」というように似た地名は各地にある。しかし、“とろく”は少なく、熊本市内に鹿が渡ると書く「渡鹿」、対馬に「トロク崎」を見つけるくらいである。

“とろく”を「土呂久」とする表記が一般化したのは１９３０年代になってからのことで、それ以前は「土路久」「外禄」「外録」という字がよく使われていた。慶長１４（１６０９）年におこなわれた検地の台帳は、現在の土呂久を４つの門に分けて、その中の一つを「猪鹿門」と記載している。いま土呂久は「惣見」「畑中」「南」の３つの組に分かれているが、猪鹿門がだいたい惣見組と一致することから、惣見組がもともとの“とろく”だったと思われる。本稿では、引用文中の“とろく”は原文通りに記載するが、本文ではすべて「土呂久」に統一する。

“とろく”の語源に関して確定した説はない。古語辞典で“とろく”を引くと、「《『とほく』の転》奥の方。底の方。辺地」⑥と説明してあることから、「とほく（遠奥）」の意味をもっているとする説がある一方で、土呂久には「むかし銀山として栄えていたころ、鉱山技術の指導に来ていたポルトガル人の名前がヨセフ・トロフだったので、トロフがなまって“とろく”の地名になった」という伝承が語られてきた⑦。

2－2　落人伝説の里

土呂久３５世帯のうち８割が佐藤の姓なので、お互いに姓ではなくて名前か屋号で呼び合っている。佐藤姓の由来は「佐藤道元の末裔だからだ」と言われてきた。道元は幼名を忠治（ただはる）といい、父は源義経の四天王のひとり佐藤忠信で、忠信が京都で源頼朝の家来によって討たれたあと、家臣に守られて九州山地の山奥に逃げ延びた。西川功著「高千穂太平記」は、「系図によっては、忠治の子兵庫允基信が臼杵郡に入り、上野村秋原に住み、後岩戸の荒谷に移り、更に西の内に移ったと言う説もある」⑧と紹介している。忠治の子が移り住んだと言われる荒谷は、土呂久の畑中組にある小字で、ここには「道元屋敷跡」と伝えられる場所があり、源氏が氏神として敬ってきた八幡社が建っている。土呂久は、「祖先は源義経の忠臣佐藤忠信で、忠信の死後、その子孫が京都から逃げ延びて隠れ住んだ」という落人伝説をもつ集落なのだ。

2－3　修験の道場

1　やんぼし様の墓

土呂久には「やんぼし様の墓」と呼ばれる石の塚が２基ある。「歯の神様」「目の神様」と言い伝えられ、昔は、目をわずらったり虫歯が痛んだりしたときに、線香をたいて焼酎を供えた。向土呂久（むかいどろく）のこんもりした茂みにある「やんぼし様の墓」には、「奉納　三部妙典　文政二年卯七月　施主　力蔵」と彫ってある。やんぼしとは山伏（修験者）のことで、石の塚は墓ではなくて、修験者が土呂久の谷で修行を終えたあと、経を納めた経塚だと思われる。

高千穂町史の「高千穂地方鉱山開発年表」に、享保１６（１７３１）年に「土呂久鉱山で金山祈祷をおこなう」⑨とあるが、このときに金山繁盛のための祈祷をしたのは修験者だったと考えられる。修験者は、鉱山で繁栄のための祈祷をしただけでなく、鉱山を発見し採

掘する役割も果たした。井上鋭夫著「山の民・川の民」に解説を書いた石井進は「戦国大名による大規模な鉱山経営が行われはじめる以前、鉱山の採取・経営にあたっていたのは『法印さま』とよばれる修験者・山伏の家だったようである。けわしい山々をわたり歩いて修行を積み、霊力をえて民衆にのぞんだ修験者たちは、また山中から聖なる金属類を採取しうる技術者でもあったらしい」⑩と述べている。

山岳の霊力を身につけることを願って、山にこもって修行した修験者は、山の植生、生態、地質、天体などに通じていた。鉱脈を見つけて掘削するのを特技のひとつとした。修験の道場だった土呂久の谷で、最初に鉱石を掘り出したのが修験者であった可能性は高い。

2　薬師堂

「母屋」という屋号の農家に、表面に「奉施入東林寺薬師瑠璃光如来御宝前」と「日向州高知尾郷折原村居住国政敬白」、裏面に「応永十九年壬辰九月念九日」と「願主　八郎　三郎」とタガネで銘を彫った鰐口が保管されている。また庭の隅にはお堂があって、中に薬師如来、日光菩薩、月光菩薩、１２神将の１５体の仏像がぎゅうぎゅう詰めに納まっている。堂の脇には、苔むした直方体、三角柱、壺、笠、半球の形の石が置いてあり、組み立ててみると８基の五輪塔になった。母屋の南に「堂屋敷」と呼ばれる場所がある。おそらく、そこに６００年以上昔の応永年間、薬師如来を本尊とする東林寺という寺があり、五輪塔が建っていたのだと推測される。

鰐口の裏面の字は表面の字に比べると、明らかに稚拙で、彫った時期も人物もちがう。母屋の佐藤富貴男さんに話を聞くと、「折原の古い家である『先』の八郎と三郎が戦に行くとき、勝ったら１２の仏像をつくってさしあげる、と薬師さんに願をかけた。戦に勝って戻ってきたので、約束の通り、仏像を自分で彫って奉納した」と聞かせてくれた。富貴男さんがいう１２の仏像とは１２神将のことだ。以前、土呂久の南組を南北２つの小組に分けて、北の小組を折原、南の小組を南と呼んでいた。その折原に住んでいた国政という人物が、応永１９（１４１２）年に東林寺にまつってあった薬師如来に鰐口を奉納し、それから後、同じ村の八郎と三郎が戦に行くときに願をかけ、願がかなったお礼に薬師如来の守り神である１２神将を寄進したということのようだ。

いまは所在不明だが、「母屋」には永享８（１４３６）年の銘がはいった懸仏形式の御正体もあった。高千穂と阿蘇の学術報告書は、この御正体のことを「径七寸一分余、木造漆箔で御正躰に光背を浮出している。光背の紋様は美しい花模様であるのも珍しい。（表に）熊野本宮、（裏に）永享八年丙辰六月一日、と漆書銘がある」⑪と紹介している。御正体は、修験者が礼拝の対象にしたものであり、そこに熊野本宮と書いてあったことは、土呂久と熊野修験との関係を暗示していよう。

土呂久の西に標高１２００メートルの四季見原（以前は椹原と表記）という見晴らしのよい高台がある。小手川善次郎著「高千穂神楽」に「修験者の本院である祖母山の椹原東福寺３６坊の遺跡もあって、これも鎌倉初期のものであろう」⑫と書いているように、鎌倉時代に、椹原には東福寺という修験の本院があって、その周辺に修験者が巡拝する３６の寺院があったのだ。土呂久の東林寺は、その中の１院ではなかっただろうか。

東林寺は明治初めの「廃仏毀釈」で壊されて、五輪塔はばらばらにされ、壺や笠や半球の形をした石が田畑を支える石垣に使われた。このとき、１５体の仏像は母屋の押し入れにかくまわれて難をのがれ、太平洋戦争が終わったあと、母屋の庭に建てられたお堂で日の目を見たのである。

土呂久に関係する古文書をひもとき、語り継がれてきた伝承に耳

を傾けると、路傍や庭の片隅にまつられている神仏が、興味深い歴史を秘めていることがわかる。

3　庵婆嶽（おばだけ）神社

土呂久の南組の路傍に「庵婆嶽神社」という難しい字の額のかかったお堂がある。土呂久の人たちは「おばだけ」とはいわずに「おば宮様」とか「うば宮様」と呼んでいる。この神社に秘められた歴史は、拙著「浄土むら土呂久―文明といのちの史記」（筑摩書房）P28～41に詳しく書いた。

もともと「おば」も「うば」も、神聖な山の水の番をした神女のことだ。初めは神女をまつっていた神社が、豊玉毘売（とよたまひめ）と日子穂々出見（ひこほほでみ）をまつる神社に変わり、江戸時代に祖母山の外宮八社（八方八王神）の一つとされて、土呂久の折原に建っていたことから「折原祖母宮」と呼ばれだす。延享4（1747）年の岩戸村神社境内書上帳⑬をみると、「土路久村之内折原村　祖母大明神」には、縦32間（約60メートル）、横26間（約47メートル）の境内に1間（1・8メートル）四方の本殿が建ち、9月13日の祭礼には神楽が舞われていたことがわかる。当時は、現在のように道沿いではなく、もっと高い場所で広い境内をもって建っていた。現在地に移ってから、祖母宮が庵婆嶽と命名されたのだが、この字をあてたのは、梵語や真言に通じた密教関係者であろう。

【八方八王神所在地図】

土呂久に修験道とのつながりを示す神社やお堂が残っているのは、ここが古祖母山に登る険しい谷だったからだ。その土地で、「山中から聖なる金属類を採取しうる技術者」だった修験者は、銀を産する鉱脈を見つけたと思われる。土呂久には、そのあとを引き継いで、銀山を開発して大金持ちになった商人にまつわる民話が伝わってきた。

2―4　西国一の長者をうんだ銀山

1　民話「夢買い山弥」

柳田国男の「日本の昔話」に、日向西臼杵郡で採集された「外録という金山」発見に関する民話「夢を買うた三弥大尽」が収録されている。ここに収録された話は、土呂久で語られてきた話とやや内容が異なるので、土呂久で語られてきた話の方を紹介する。

「むかし、豊後の府内（大分）に山弥という商人が住んでおった。行商の途中、峠で出会った男と世間話をしておるうちに、眠った男の鼻からハチがでてきて、遠くの山へ飛んでいった。しばらくして戻ってきたハチの足に銀の粉がついておる。ハチが鼻の中に返っていくと、目をさました男が『大きな岩かげにまばゆいばかりに銀が輝いておる夢を見た』と言った。山弥はポンと手をうつと、『ぜひわしに、その夢を売ってくれ』と頼んで、行商の品物を全部渡し、代わりに夢の中で見たという場所を聞いた。来る日も来る日も山を歩き、その場所を見つけると、ツルを打ち込んで豊かな銀の鉱脈を掘りあてた。山弥は西国一の大長者となり、土呂久から府内まで千両箱を並べ、その上を跳びながら銀山通いをつづけたげな」

ここまでは、夢を買って財宝を探し当てるという致福譚なのだが、土呂久の民話はここでは終わらず、突然、次のような没落譚に変わる。

「山弥が府内に建てた豪邸は、天井がギヤマン張りで、その上に水を張り、色とりどりの金魚を泳がせておった。ある日、殿様がやってきた。山弥は珍しい品々を見せたあと、殿様をギヤマン天井の部屋に案内し、ごろっと仰向けに寝ころがったかと思うと、足を高く上げて金魚を指して、殿様に説明を始めた。『無礼者め！』。山弥の態度に怒った殿様は、山弥の財産をとりあげて、四いとこまで一族をみな打ち首にしてしもたげな。それから、鉱山で鉱石を運ぶときは『ヨイトコサンヤ』の掛け声が聞かれるごつなった」

山弥が銀山を開発して長者になった致福譚が、財産を没収されて一族が殺されるという没落譚に転じたのは、この民話の背景に、歴史的な事実が隠されていたからだ。

2　実在した守田三弥

大分県庁に近い大分市大手町に「山弥長者屋敷跡」という史蹟があり、大分市史は、守田三弥之助氏定という人物が、日向の銀山を経営して大富豪になった、と記載している。その根拠の一つが、福岡藩の儒学者貝原益軒が元禄７（１６９４）年に著した「豊国紀行」で、そこには「先年府内に日根野織部殿在城の時、彼町に古田三弥と云商あり。日向の銀山にて銀を多く取て大富人となり府内に家宅を作る。其家大にして美麗なり。かやうの富人は諸国にまれ也。いささか城主の気に背く事ありてころされ、其妻子一族ことごとく刑にあふ」（筑紫豊写）と書き残されている。

また同時代の作家井原西鶴の「日本永代蔵」に、三弥をモデルにした「国に移して風呂釜の大臣」という小説が収録されている。菜種の栽培で大金持ちになった万屋三弥は、京都見物にでかけて享楽を知り、毎日、京都の音羽の滝の水を府内まで船で運んで風呂の湯にするなど、贅沢の限りを尽くして破産したという話である。蓄財の理由が鉱山経営ではなくて新田開発になっていること、没落の理由が藩主の怒りにふれたことではなくて放蕩によるものであることなど、明らかに創作なのだが、西鶴が大富豪となった府内の三弥を小説の主人公としたことは、三弥の成金と没落の話が広く関西地方にまで知られていたからであろう。

実在した守田三弥はいつの時代の人物だったのか。宮崎の民俗学者山口保明は、土呂久に伝わる伝承を大分に残る記録で裏付けながら「山弥の在世時代を天正１２（１５８４）年から正保４（１６４７）年までの６３年として間違いあるまい」⑭と述べている。守田三弥が土呂久銀山を経営したのは、１７世紀の前半とみることができるのだ。

山弥が殺されるところまで、土呂久の歴史は伝承を主軸にしてつくられるしかないのだが、これ以降の歴史は、残されていた文書を軸に伝承で補っていくことになる。

【山弥長者屋敷跡案内掲示板】

Ⅲ章　土呂久鉱山史

3－1　江戸中期の煙害

守田三弥が１６４７年に刑死したあと、土呂久鉱山はいったん休山したとみられる。高千穂町の向山（むこやま）の庄屋が書き残した「珍書雑記」⑮に、「明暦元年、岩戸土路久山初ル」とあることから、休山していた鉱山は明暦元（１６５５）年に再開されたことがわかる。同書は「承応３年、山裏登尾山初ル」と、その前年の承応３（１６５４）年に土呂久から東へ峠を越えた登尾鉱山で採掘が始まったことも書いていて、１７世紀の中ごろは、岩戸村の土呂久と山裏村の登尾をふくむ一帯が鉱山として開発されていたことをうかがわせる。

１６５５年の再開から３５年後の土呂久鉱山に関する興味深い古文書の記載がある。高千穂の庄屋矢津田家に残る「巖秘録」という文書は、元禄３（１６９０）年に「岩戸村煙痛漆木六拾八本六歩分漆壱貫三百七拾貳匁指免候事」⑯と、岩戸村の鉱山すなわち土呂久鉱山で、煙痛（煙害）によって漆の実の収穫が減り、減免措置がとられていたことを記している。郷土史家小手川善次郎が写筆した「岩戸村勘文帳」⑰をみると、減免はその前後もおこなわれており、少なくとも貞享４（１６８７）年から元禄４（１６９１）年までつづき、被害は漆の実１貫３７２匁と決まっていて、減免された小物成の額は毎年、銀４８匁２９だったようである⑱。

江戸時代中期、土呂久の山のあちこちにかね吹きの床屋が立ち並んで銀を精錬したとき、鉱石に含まれていた有害な鉱物が酸化して煙とともに飛び立って漆の木に害を起こしていたことを物語っている。

3－2　幕末の繁栄

１９世紀に入ると、土呂久鉱山は延岡の内藤藩直営の銀山となって繁栄する。延岡市立図書館所蔵の石川恒太郎写「内藤家所蔵文書（二）旧延岡領鉱山沿革」には、土呂久銀山について「弘化二年頃ヨリ安政三年頃迄　御手山。但嘉永五年ニハ江戸表ヨリ酒井五左衛門御雇入相成、其翌年殿様御検分迄之レアリ。引続五、六年間ハ盛大ナリシカ如シ」⑲と、弘化２（１８４５）年から安政３（１８５６）年まで藩直営鉱山として銀の産出でにぎわったことを記している。

この時期の最大の出来事は、嘉永５（１８５２）年に延岡藩が江戸の酒井五左衛門を銀山奉行として雇い、翌年１１月に藩主内藤能登守政義がじきじきに土呂久銀山を視察したことであった。岩戸での人馬や賄いなどを準備した永の内の庄屋土持信贇（つちもちのぶよし）が書いた日誌が、高千穂町史に引用されている⑳。その記述をもとに、藩主の鉱山視察を再現してみると――。

１１月２６日午前６時に岩戸村岩神の本陣を籠でたった能登守は、天岩戸神社に参詣して神楽を見て、王子権現の前で茶を飲んだあと、昼ごろ土呂久銀山に着いた。昼食を終えると、大曾（おぞ）から吹谷まで坑口や銀を精錬する床屋を順番に見て回った。延岡からのお付きの者が、銀山の門内で藩主一行の賄いをしたので、銀山の門の外の村方が気をつかうことはなかった。土持信贇や高千穂の人馬方は、村の農家に泊まった。

１１月２７日、銀山に滞在した能登守は、惣見にある鶴亀敷と呼ばれていた坑内を視察した。（鶴亀敷は、現在の土呂久北端の民家よりさらに約３００メートル上方にあった坑口。）そのあと、今回の視察に貢献した土持信贇ら３人に土産として銀５匁が渡され、３人はさらに、鉱山の賄所より酒５升と魚２尾ももらった。翌朝の出立時の人足４４０人が夕方までに到着したので、信贇は南、折原、畑中の農家に宿泊するように手配した。

１１月２８日、能登守一行は、昼ごろ土呂久銀山をたち、天岩戸神社で休んで、午後５時に岩神の本陣に到着した。

このようにして銀山視察を終えた能登守一行は、２９日午前６時に岩戸村岩神の本陣をたって帰路につき、延岡城に戻ったのは１２月１日だった。延岡から土呂久まで約６０キロの山道を籠で往復する旅は、現代では想像できないほどの困難がともなったであろう。それだけの苦労をして土呂久銀山を視察するほど、江戸末期の延岡藩にとって銀の必要性は大きかったのである。

しかし、延岡藩が期待するほど土呂久鉱山の銀の産出は多くなかったようだ。能登守の視察から４年後の安政４（１８５７）年、土呂久銀山の所有は熊本の細川藩の手に移る。

３－３　渡り鉱夫の墓

土呂久には「女郎屋敷」「吹谷」「鏑（ひ）の口（樋の口）」「富高屋」「町」「寺屋敷」「番所」など、鉱山に関連した地名が残っている。寺屋敷と呼ばれるのは、土呂久川にかかる惣見橋の南西の竹林あたりで、この一帯には銀山時代の墓が建っていた。風化した墓碑銘に目を凝らすと、江戸後期の鉱夫（金堀工）とその家族の墓であることがわかる。

寺屋敷の東には「金堀繁蔵墓　三十二才　嘉永七年二月十八日」「□□行蔵　嘉永七年二月十二日」「豊後□□□　嘉永七年正月三日」「金堀工　俗名　幸平墓　行年四十五才　嘉永六年九月九日」「豫州新郡別子村　新蔵　安政二年六月二十三日」「伊豫国新郡　金堀寅市　嘉永七年七月□□」などと読める。寺屋敷の南には、明治以降の墓にまじって「金堀豊作　妻　京　栄太郎　安政四年九月十八日」「本庄十日町　鳥原永右□□　安政二年九月十四日」「川□町北方　□□□　安政三年三月三日」「出羽金堀　柏木千代松　娘　あさの　年四才　文久三年三月二十二日」「佐伯　俗名十兵衛　五十才　安政六年十二月十日」「春中村　□□□□　文久四年□□□□」などと刻んだ墓が傾いて残っている。

ここに埋葬されたのは、全国の鉱山を転々とした渡り鉱夫とその家族たちである。幕末に土呂久鉱山がにぎわった時期、東北の出羽国、四国の伊予国新居郡、九州の佐伯などを出郷した鉱夫が、はるばる祖母・傾山系の谷間にまで足をのばしていたことを教えている。

【金堀繁蔵墓】

３－４　明治以降の土呂久鉱山

明治７（１８７４）年に宮崎県から地史編纂を委嘱され、日向をくまなく調査した元飫肥藩校振徳堂教授平部嶠南が著した「日向地誌」に、幕末から明治にかけての土呂久銀山のようすが記してある。岩戸村の項で土呂久銀山に関し、「坑物発見ハ元和二年丙辰ニ起リ、其後屢廃シ屢興ス。嘉永五年壬子延岡藩主内藤氏吏ヲシテ着手セシムル。十年許引継キ、熊本藩主細川氏再ヒ吏ヲシテ着手セシムル。五、六年ニシテ一時休廃セシカ、明治十二年巳卯四月鹿島（ママ）士人長崎武一郎ト云者又復発起セリ。一ヶ年出来高未タ詳ナラス。其質極テ佳ナリト云」（句読点は筆者）㉑と紹介している。

宮崎県企画局が１９５５年に発行した「宮崎県経済史」の第３６表明治２年臼杵郡鉱山概況には、岩戸村の外録銀山は明治元

（１８６８）年７月熊本藩に掘削を任せた、との記載がある。また鹿児島県鹿児島郡山下町の長崎豊十郎と長崎武一郎が明治１７（１８８４）年に作成した「宮崎県日向国臼杵郡岩戸村字向土呂久銀山ニ係ル取調書」㉒には、「明治十二年四月、熊本県肥後国阿蘇郡津留村士族橋本猪十郎ヨリ譲リ受ケノ事」と書いてあり、こうした記述から、明治初め、土呂久銀山は延岡藩から熊本藩の家臣の手に渡り、そのあと明治１２（１８７９）年に、元鹿児島藩の家臣長崎豊三郎と武一郎の所有となって採掘されたことがわかる。この取調書には、製鉱の方法は「石畳シテ深サ凡ソ四尺、巾三尺四方ノ角ナル炉、吹方ハ、タタラ吹キ」だったと、江戸時代からの精錬法を紹介し、産出量として「鉱石ハ不明、鉛三十五貫目、正銀ハ三百五十目ヲ得ベシ。即チ一分ノ割合ナリ」、行業損益として「一ヶ年ニ付諸入要費二千四百円、得ル所ノ産出正銀十三貫目、此ノ代価三千二百五十円、差引利益金八八百五十円也」と書いている。当時の１円を現在の３８００円として計算すると、年間の収益は３２３万円だったことになる。土呂久鉱山の経営はそれほど魅力的ではなかったと思われる。

宮崎県統計書をみると、明治２４（１８９１）年度に土呂久吹谷の外録鉱山（のちの採登第８０号鉱区）では鉱種として銀、銅、鉛を登録しているが、鉱品の出来高は３１貫（１１６キロ）にすぎず、経営は細々としたものだった。その後、休山して採掘はおこなわれず、日本鉱業名鑑によれば、大正９（１９２０）年に鉱業権者の竹内令貯が金、銀、銅、亜鉛、鉛、砒の６つの鉱種を登録し、砒粗鉱５万１４００貫（１９３万トン）を採掘したことになっている。つまり、この年から砒素の鉱石の採掘が始まったのだが、ここには砒鉱を焼いて採取した亜砒酸の生産高の記載がない。土呂久鉱山における亜砒酸の生産高が記載されるのは、昭和８（１９３３）年に鉱業権者が変わってからである。このことは１９２０年から１９３２年までは、亜砒酸は「鉱業」として生産されたのではなく、佐伯の亜砒酸工場のように、鉱山から砒鉱を買った者が「工業」製品としてつくっていたことを推測させる。

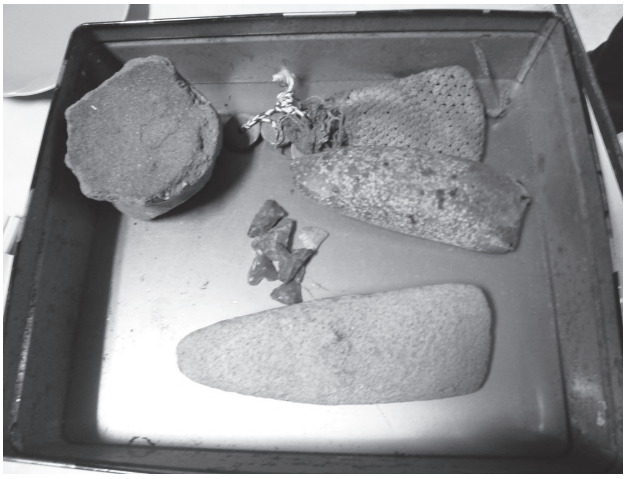
佐伯では、木浦鉱山などから遠路運んできた粗製の亜砒酸を工場で精製して純度の高い亜砒酸にしたのだが、土呂久では、鉱山で掘り出した硫砒鉄鉱を同じ敷地内にある粗製の亜砒焼き窯と精製窯で焼いて亜砒酸を採取した。土呂久鉱山一体になって亜砒酸製造をおこなったのに、鉱石の採掘は「鉱業」、亜砒酸の製造は「工業」として報告されたのだ。そんな形態をとったのは、鉱石の採掘者が地元岩戸の人物、亜砒酸の製造者が佐伯からきた人物だったからであろう。視野を祖母・傾・大崩山系に広げてみたときに、土呂久鉱山で亜砒酸製造が始まった時代背景が読めてくる。

Ⅳ章　土呂久の産業

４－１　狩猟採取

源義経の忠臣佐藤忠信の子孫が住みついたという落人伝説をもつ土呂久で、実際に人が住み始めたのはいつだったのか。土呂久の南５キロにある天岩戸神社の徴古館に展示されている土呂久出土の石器２点（石斧と石棒）が、その手がかりになるだろう。

土呂久の「母屋」の佐藤ツルさんは、石斧や黒曜石の鏃



【土呂久で出土した石器】

を手提げ袋にいれて保管していた。「子どもたちが遊びの道具にしていたので、とりあげて手提げ袋にしまっておいた。畑を掘ると、石器はいくらでもでてくる」とツルさんは話してくれた。鑑定していないので、いつの時代の物か定かではないが、土呂久では石器時代から人が暮らしていたのかもしれない。

そんな推測をさせるのは、宮崎県最古の遺跡、日之影町の出羽（いずるは）洞穴が土呂久から直線で約10キロ、現代人の足でも日帰りできるところにあるからだ。この洞穴には、約2万年前から8千年前まで人類が住んでいたとされ、出羽を根城とする石器時代人が土呂久の谷まで足をのばして狩猟採取をしていたことは十分にありえたことだ。

4－2 焼畑から常畑へ

土呂久では、焼畑のことを「やぼ作」と言い、太平洋戦争後の食糧難の時代にも山の斜面の藪を切って、作物を植えていた。狩猟採取のあと、土呂久で最初におこなわれた農業は焼畑だった。慶長14（1609）年に検地がおこなわれたときの記録「岩戸村竿帳」㉓をみると、土呂久は白石（現在の畑中）、猪鹿（惣見）、折原（南組の北半分）、南（南組の南半分）の4つの門に分かれていたことがわかる。耕作地は畠（常畑：上・中・下に等級付け）と山畠（焼畑）と切野（カヤ場）に分類され、地籍ごとの面積が記載されている。岩戸村竿帳をもとに、門ごとに面積を集計したのが表である。17世紀の初めには、常畑が焼畑よりやや広く、まだ水田は開かれていなかった。

耕作地／門	畠			山畠	切野	計
	上畠	中畠	下畠			
白石門	9畝10歩	2反7畝 6歩	6反2畝28歩	1町7反4畝 1歩	1反9畝 5歩	2町9反2畝20歩
猪鹿門	2反3畝 3歩	1反8畝20歩	2町4反7畝	1町9反9畝18歩	1町2反9畝 5歩	6町1反7畝16歩
折原門	1反2畝	5反1畝14歩	8反2畝24歩	1町1反4畝 5歩	1反9畝	2町7反9畝13歩
南　門	9畝10歩	3反5畝27歩	2反9畝	6反1畝20歩	1反5畝	1町5反　27歩
合　計	5反3畝23歩	1町3反3畝 7歩	4町2反1畝22歩	5町4反9畝14歩	1町8反2畝10歩	13町4反　16歩
	6町　8畝22歩					

【岩戸村竿帳をもとに作成した土呂久の耕作面積】

4－3 水田の開発

1　土呂久で最古の水田

土呂久で最古の水田は、畑中の谷から土呂久川に流れ込む水を引いて、土呂久川沿いの「田久保」につくった田である。記録に残っているものでは、享保17（1732）年の検地帳に、白石門の「たて屋の南」「川むこ」「家ノ前」の3か所に合わせて9畝25歩（約100平方メートル）の水田の記載がある。その後、開田が進み、藤寺非宝著「岩戸村田成開発史」によると、140年後の明治4（1871）年、土呂久内の水田は5反7畝4歩（約5600平方メートル）に増えている。これらの田は、沢の水や湧水をつかったものだ。

2　土呂久川からの用水路開削

古祖母山麓の岩戸地区は、深い峡谷をつくって川が流れており、大規模に開田するためには、標高の高いところから用水を引いてくる必要があった。最初に用水路開削の調査をしたのは上寺の農民で、「岩戸村田成開発史」は「土呂久用水最初の見立は文政12（1829）年正月で、本村用水路として測量は最も古かった」㉔と書いている。この調査は、土呂久の「樋ノ口下」を水源に想定しておこなわれたが、工事が困難なことがわかって、天保6（1835）年に「トロク井手口鶴ノ脇」に水源を変更して調査をやり直している。現在は上寺用水と呼ばれている土呂久用水の取水口は、最終的には「惣見」に決まり、文久元（1861）年から文久3（1863）年8月まで2年8か月かけて、惣見から上寺まで130余町（約

１４キロ）の用水掘削工事がおこなわれた。上寺地区に建っている「土路久水神石銘」に、「抑此用水祖母嶽南面之富麓（ママ）門惣見ヨリ五ヶ村門迄百三拾余丁。其中、岩下東ヨリ西荒谷エ堀貫八拾間。去ル文久二壬戌七月ヨリ元治元甲子七月荒谷へ堀貫通水成就。同年見分有。辛酉ヨリ文久三葵亥四月五ヵ村堀通」と彫ってあるように、この用水を完成させるには、岩下東と西荒谷の間のトンネル８０間（１４４メートル）をぬかねばならなかった。この難工事を成功させたのは、ぬき掘り熊五郎という人物で、そのときのトンネル工事の設計図が残っている。

上寺用水が１８２９年の調査開始から１８６３年の完成まで３４年かかった間に、一足早く開通したのが東岸寺（とうがんじ）用水である。土呂久の南４キロにある高台の東岸寺では、谷底の土呂久川の水を運び上げて暮らしていた。大火で集落をほぼ全焼させたあと、水の必要性を痛感して、安政２（１８５５）年に総出で２３３日間汗を流し、土呂久の「駄渡瀬」から東岸寺の「上之地境」まで５・２キロの用水路を掘り通した。開通したときの喜びを岩戸村庄屋御用日記は、次のように記している㉕。

「今日、四ツ頃水流れ始め候処、暮六ツ頃東岸寺へ水流着申候。二月九日より今日迄二百三十三日にて水流着、井手下弐拾弐軒老若男女井手端に立出で歓びの声暫らく鳴りも不止。大乗院（黒原、山伏）相招即刻水神祭御神酒上致し、夜半頃東岸寺出立帰舎」

土呂久の人々は、土呂久から東岸寺まで用水を掘る大事業を「どうして東岸寺まで水が行こか」と笑いながら見ていた㉖。しかし、実際に用水がぬけて広い田が開かれ、水稲が育つのを見ると、自分たちも沢の水や湧水に頼る狭い田ではなく、川の水を使う広い田が欲しくなった。

３　水利権裁判

土呂久南組の唵婆嶽神社の北側にある田んぼの畔に「明治十二年巳卯四月十日　新開田□□間　新開主　佐藤辰平」と彫った水神石が建っている。「辰平じいさんが田を開いた記念に建てた。１反２畝（約１２００平方メートル）の田を、機械があるわけじゃなし、自分の手だけで、竹モッコで石を引いて開いた。水は塩井元（しうんもと）の湧き水を引いた」と、孫の全作が誇らしげに話してくれた。明治１２（１８７９）年当時は、南組を通って流れる東岸寺用水の水を「土呂久の農家は用水を開くのに協力せんかったから」という理由で、利用することができなかったのである。用水の水利権を買って開田できるようになったのは、大正後期のことだった㉖。

上寺用水でも、取水口近くの人たちが土呂久川の水を使って稲作を始めようとしたところ、上寺の農民から「水利権の侵害だ」と反対された。土呂久川の水を使って水田を開けるのは、権利をもっている上寺の農家だけで、土呂久の農家はたとえ目の前を流れる水であっても使うことができないと言われたのだ。惣見組の小笠原利四郎と佐藤為三郎の２人の青年が、土呂久川の水で水稲耕作をおこなうことを求めて裁判に訴え、宮崎地裁で有利な判決をかちえた。驚いた上寺の用水組合が長崎控訴院にもちこんで、最後は１町５反の開田を認める和解で終結した㉗。

惣見組で、焼畑に育つ陸稲から川の水を使った水稲への転換が本格的に進むのは、水利権裁判で和解した明治の半ばを過ぎてからのことだった。

４　モカさんの大石垣

土呂久の急な斜面に田畑をつくるには、山肌にころがる大岩を砕いて、小さくした石で石垣を築き、その上を平らにならす必要があった。「岩戸村田成開発史」は、明治の終わりに土呂久の開田に力を

注いだ女性（佐藤モカ）のことを紹介している。

「彼女は性質極めて勝気で所謂男勝りであった。幼児より最も好むものは、女に似合はしからざる石垣築きであった。頭をばいつも手拭で徳利包みにして、キリッといでたち、夜となく昼となくその近くの石原同然の原野を開墾した。（略）驚かされることは、どうにも始末のつかぬ大石をば女の身を以てこれを玄翁でもってたたき壊したものであった。先ず大石の下に穴を掘り、それに若竹等を沢山つめ込んで火を焚き、ウンと熱した時、上から玄翁を参らせた。所が石を熱しめることは寒中に限るので昼は薪を集め夜は徹夜しながら火を焚き、その暖かみでうたたねをしたといふ。大正元年11月15日81歳の高齢を以て念仏もろとも大往生を遂げたが、モカ女の信仰とその大事業は今尚世人の耳に残って居ることで、実際に見なければ合点の行かぬ程の大石垣である」㉘

同書によると、モカと夫歳松で開いた田13枚2反5畝（2575平方メートル）、畑16枚1町1反2畝（1・1ヘクタール）、田畑を支える石垣は約1000坪（3300平方メートル）におよぶ。その中のもっとも大きな石垣を「モカさんの大石垣」と呼ぶ。この大石垣に支えられた水田は、鉱山が規模を拡大するときに買収されると、作物を育てる農地ではなく、鉱山の廃棄物の捨て場に変わり果てた。

【モカさんの大石垣】

4－4 畜産の伝統

土呂久は、空気も水も飼料も気候も畜産に適している。集落よりかなり高いところに土呂久平という場所があり、江戸時代に放牧場が開かれて、明治中期以降、岩戸だけでなく高千穂のいろいろな地域から牛を連れて来て放すようになった。

池田牧然獣医が大正14（1925）年に書いた「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉱山ヲ見テ」㉙は、この放牧場のことを「旧藩時代岩戸庄ノ牛馬ヲ混牧シタガ、明治初年頃カラ牛ノ放牧ニ改メ、壮幼牛ヲ毎年百余頭宛放牧シタモノデアル。然ルニ明治中年頃、土呂久部落有放牧場トシテ、其ノ面積約二百町歩ノ主要ナル区域ニ土柵ヲ、森林界ニ木柵ヲ繞ラシ、稍々完備シタ放牧場トナシ、七折、高千穂、上野方面ノ畜牛ヲモ収容スル事ニシタガ、其成績ガ誠ニ良好デ、五月初旬ニ入場セシメテ十月下旬ニ退場セシムル時ハ、殆ンド入場当時ノ影ヲ止メヌ位良ク成長肥満シテ、一般畜主ノ満足ヲ得タモノデアルガ……」（句読点筆者）と紹介している。

【現在の土呂久畜産農家】

池田牧然の文書によると、土呂久の農家が飼っている馬は明治３０（１８９７）年ごろから、「土呂久馬（外禄馬）」の名前で県内外の商人の間で知られるようになった。「土呂久ノ先覚者ガ『アラブ雑種』ノ種牡馬桔梗野号ヲ郡ヨリ貰ヒ受ケ、之デ一般馬匹ノ体型ヲ整理シ、其レニ明治４０年頃『トロッター雑種』ノ種牡馬ヲ入レ、幅員アル短肢小格ノ馬ヲ作ル事ニ努メタカラデアル。ソレデ県内外ノ商人ハ、土呂久馬ハ強クテ後デ体格ガ出来テ使役一等ト評判シタモノデアル」。土呂久馬は、がっちりした体格で力が強く、農耕や運搬に最適と評判はよかった。それを裏付けるように、惣見組の民家には、明治４３（１９１０）年から大正５（１９１６）年にかけて佐藤熊彦所有の牝馬下山号が、馬政長官から産馬奨励金を８回合計４４０円授与された証明書も残っていた。

池田牧然は、大正中期に土呂久４４戸で飼育している馬は３２頭、牛が５５頭と記し、「毎年ノ生産犢ハ立派デ品評会デモ優勝シ、糶市ノ価格モ郡ノ一位ヲ占ムルモノガ多イ。候補種牝牛ヤ候補種牡牛ハ、大概此部落生産ノモノカ、又ハ、其系統ニ連ルモノガ多イト云テモ宜イ位デアル。何様土呂久ハ、畜産ノ歴史モ古イガ、畜産地ト指ヲ屈シテモ辱カシカラザルモノデアル」と、土呂久が古い歴史をもつ屈指の畜産地であると述べている。

４－５　山の自然とともに

大正中期の換金作物として、蜂蜜、シイタケ、カイコ、タバコ、杉、竹などがあった。池田牧然の文書には、蜜蜂について「地勢ノ関係等良イノデアラウ。在来種ノ蜜蜂ガ良ク巣ニ入ルノデ、各戸蜜蜂ヲ養ナツテ居ナイモノハ殆ンド居ナイ。多ク持ツテ居ルモノハ、百箱以上モ持ツテ居テ、部落デ蜜ノ総生産高ハ実ニ大シタ者。其量ハ判然セヌガ、一ケ年ノ蜜代デ煎子、鰹節、砂糖、油代ハ充分ニアツタト云フテ居ル」と書いている。当時の山村では、現金で購入しなければならなかったいりこ、鰹節、砂糖、油代が１年間の蜂蜜の販売収入で十分にまかなえたというのだ。シイタケについては「同部落ノ主要物産デ、先ヅ椎茸ノ生産高デ、納税其他農家ニ必要ノ経費ハ、之デ支払ツテ居ルト云フテモ良イ位ダト云ツテ居ル」と、シイタケの売上金で納税その他の必要経費を支払っていたという村人の話を紹介して、「牛馬ノ売上代トカ農産品ノ売上金ハ貯ヘトナツタラシイ」と書いている。池田牧然の記録から、鉱山で亜砒焼きが始まる前、山の自然と共生する豊かだった土呂久の暮らしを想像することができる。その時期に、土呂久では稀有の自治組織が機能して、山村の共同体の維持に努めていた。

Ⅴ章　解体期の共同体

５－１　和合会創設

土呂久に和合会がつくられたのは明治２３（１８９０）年のことだった。和合会は昭和４０（１９６５）年に行政の末端組織である公民館と合併したので、現在、その組織はない。土呂久公民館の書記のもとに和合会の議事録が保管されていたころ、桐の箱におさめられた何冊もの議事録を読ませてもらうことができた。

その中の一冊に、表紙に「和合會盟約條例」と書かれた文書があった。表紙を開けると、「本村大字岩戸門ニ於テ創立スル和合會盟約條例ヲ認定ス」とあり、「明治二十三年九月十三日　西臼杵郡岩戸村長　土持信敞」という署名と、その上に岩戸村長の公印が押してあった。和合会は、村長が認定するという公的な手続きを経て創設された組織だったのだ。次を開くと、変体仮名で「人奈連哉（ひとなれや）人奈連哉誠の人奈連哉」と、姿や形の美しさではなく身業（ごう）（行動）、口業（言葉）、意業（意識）の清く正しい誠の人になれという教えを説いた前書き

がでてくる。その最後に「編者　佐藤善縁　識ス」とあって、和合会盟約条例を編集した佐藤善縁という人物が、この前書きを記したことがわかる。

公的な格式を踏んで創設された和合会は、何を目的とした組織だったのか。条例第2条に「本会盟約公衆ノ財産ハ一般盟約公衆ヘ融通シ互ニ公正ノ利ヲ材（はかる）モノトス」、第3条に「盟約公衆ニ限リ税金滞納且身代限リ等ノ事件ニハ本会ヨリ救助シ目悪キ姿状ヲ他人ニ顕サルコト」、第7条に「本会公衆ニ限リ税金其他生死等急迫ノ際ハ抵当無シ貸与ス」、第13条に「本会公衆ニ限リ猥ニ抵当品ヲ他村ニ書込ムコトヲ禁ス」とあることから、土呂久の裕福な農家から基金を集め、無担保低利で融資し、税金滞納や破産の窮地の者を救おうとする組織だったことがわかる。和合会創設の1890年は、前年秋の全国的凶作で米価が高騰、資本主義経済による恐慌的不況によって人々の生活が追いつめられた年だった。土呂久も深刻な生活苦に襲われたにちがいない。そんな時期に、土呂久の財布をひとつにして、土呂久内の土地が不在地主の手に渡らぬよう共同の力で守ろうとした。資本主義経済の全国的な浸透によって、農山村に確立していた共同体が解体されていく時期に、解体期の共同体を維持存続するためには、このような金融互助組織が必要だったと思われる。一種の金融機関だったから、その創設に村長の認定を必要としたのであろう。

5－2 創設者

和合会を創設した佐藤善縁は、どんな人物だったのか。1972年8月に土呂久の長老佐藤竹松から聞いた話が残っている。「和合会の創立者は佐藤善縁という坊さんだった。今の公民館長の佐藤福市さんの叔父さんで、生きていれば120歳くらい。土呂久を統一するには金融機関をつくらねばと考えたようだ。和合会の総会は、始まる前に必ずお経を読み上げた。規約で、時間の励行、債権者が無理な利息を取り上げる場合は、中に立って弱い人を助けることなどを決めていた。もし犯罪をおかした人がおれば、名誉を守るために外に出さず、内輪でおさめるようにした。亜砒酸製造が始まる前までは、和合会はおおかたまとまっていたが、製造が始まってから利害の対立が起きて喧嘩会になり、最近壊滅した」㉚

佐藤善縁は土呂久の「長石」で生まれ、岩戸にある浄土真宗泉福寺の伴僧となり、彦根で修業したあと土呂久に帰ってきた。貨幣経済が浸透する農山村で、高利貸から担保にした土地をとられる状況に心を痛め、集落の農地をよそ者にとられることのないように、彦根でみてきた金融機関を参考にして和合会を創設したのだ。

【和合会創設者：佐藤善縁】

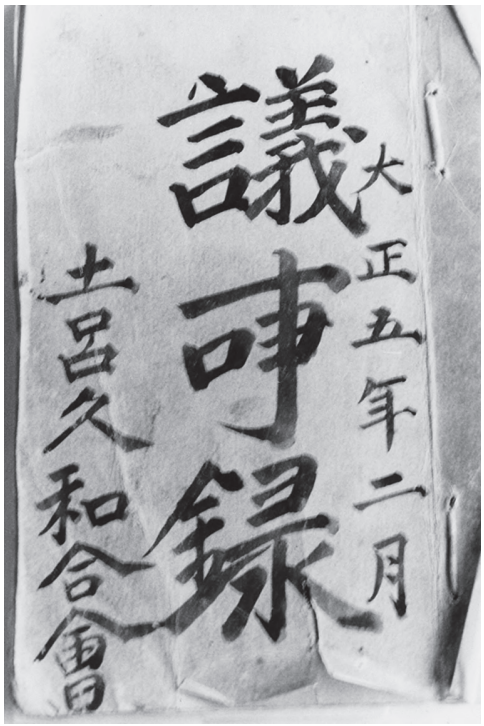
5－3 自治組織に発展

金融互助組織として出発した和合会は、明治44（1911）年3月、「外録組合改良規約会」と合併する。規約会は明治34（1901）年につくられ、第2条に「本会ノ目的ハ、品行端正ヲ旨トシ、改良適進歩上総而諸般ノ整理改革ヲ計ニアリ」と定めているように、行事参加の際の時間順守、納税の義務履行など、近代化する社会の要請に応じて、罰則をもうけてまで土呂久地区住民に規律を身につけさせようとした組織だった。この合併によって、金融互助組織だった和合会は、重要事項を決議する立法、それを執行する行政、犯罪の捜査や処罰など司法の権限をもち、さらに農産物の共同購入や産業組合化を勧めたりする集落の自治組織へと発展した。

1965年に公民館に移行して忘れられかけていた和合会が、日の目を見たのは1971年11月のことだった。土呂久の子どもたちが通う岩戸小学校の齋藤正健教諭が、公民館書記の家を訪ねて、桐の箱におさめられていた議事録を手にした。齋藤の目は、大正12（1923）年5月25日に開かれた総会の議事に釘づけされた。

一、亜非酸（ママ）害毒豫防法設備ニ関スル件
害毒豫防方（ママ）トシテハ完全ナル設備ヲナシ事業ヲナサレン事会員一同万乗（ママ）一致ニテ当事務主任者へ願フ事

大正9（1920）年6月、土呂久鉱山で亜砒焼きが始まって3年後に、集落の自治組織である和合会が、亜砒酸製造による害毒の予防を鉱山事務所に願い出ることを決めたという記載である。山の自然と共生していた暮らしが、外から侵入してきた貨幣経済で壊れかけたのにつづいて、こんどは鉱山が生産する亜砒酸の毒に襲われようとしていた。和合会議事録は、砒素公害にあらがって共同体を守ろうとした住民の足跡を刻む重要な記録としてよみがえってきた。



【和合会議事録（表紙）】

《参考資料》

① 高千穂町史P582～583：1973年
② 宮崎県：宮崎県の地質と地下資源P47：1963年
③ 斧石林勝美先生遺稿P152：1960年
④ 佐伯市史P699：1974年
⑤ 鮫島ヤエの証言：土呂久図書館A-2-13のDSC02127
⑥ 古語辞典：角川書店
⑦ 日向日日新聞：続珍説地名考101：1958年8月14日
⑧ 西川功「高千穂太平記」P172、高千穂郷史同好会：1972年
⑨ 高千穂町史P583：1973年
⑩ 石井進「山の民・川の民」（井上鋭夫著）の解説P13：平凡社：1981年
⑪ 高千穂・阿蘇P441：神道文化会：1960年
⑫ 小手川善次郎「高千穂神楽」P28：1976年

⑬ 延享四丁卯年十月岩戸村神社書上帳：高千穂保存会編紀元二千六百年記念高千穂特別記録文献資料（２）

⑭ 山口保明「山弥伝承についてーある一つの淵源―」Ｐ４４：口承文芸研究第８号：１９８５年５月

⑮ 珍書雑記：高千穂町史年表Ｐ２９：１９７２年

⑯ 宮崎日日新聞：１９７２年１月２１日

⑰ 岩戸村勘文帳：小手川善次郎遺稿：土呂久図書館Ｂ－１－１１のＤＳＣ０９０３５

⑱ 土呂久図書館Ａ-１-７のＤＳＣ０２０３１～ＤＳＣ０２０３３

⑲ 石川恒太郎写「内藤家所蔵文書（二）旧延岡領鉱山沿革」Ｐ４４９：延岡市立図書館所蔵

⑳ 高千穂町史Ｐ５８９：１９７３年

㉑ 平部嶠南「日向地誌」（復刻版）Ｐ９６３：青潮社：１９７６年

㉒ 高千穂町史Ｐ５９０：１９７３年

㉓ 岩戸村竿帳：小手川善次郎遺稿：土呂久図書館Ｂ－１－１１のＤＳＣ０９０４８～ＤＳＣ０９０５４およびＡ－１－６のＤＳＣ０１７３４～ＤＳＣ０１７３９

㉔ 藤寺非宝「岩戸村田成開発史」Ｐ１２９

㉕ 藤寺非宝「岩戸村田成開発史」Ｐ８０

㉖ 佐藤全作の証言：土呂久図書館Ａ－１－４のＤＳＣ０１４６４～ＤＳＣ０１４７１

㉗ 上野登「明治の教訓を今訴訟に」：鉱毒１７号：１９７６年１０月

㉘ 藤寺非宝「岩戸村田成開発史」Ｐ３０

㉙ 池田牧然「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉱山ヲ見テ」：岩戸村政永久史料：１９２５年４月

㉚ 佐藤竹松の証言：土呂久図書館Ａ－２－１７のＤＳＣ０９２９９

＊土呂久図書館は、宮崎県高鍋町の野の花館にあって、筆者が収集した文書を所蔵している。特定非営利活動法人アジア砒素ネットワークは、その文書を撮影してデジタル化し、宮崎市にある事務所のハードディスクに収納している。後ろに書いている整理番号で検索すると、その文書を見ることができる。